

## 講演

# ヨーロッパにおける多文化共生

## —イスラーム教徒移民の社会統合—

<日時> 008年10月3日(金) 17:00 - 19:00

<場所> 神戸大学国際文化学部・大学院国際文化学研究科 E棟 4F 大会議室

<参加人数> 72名

### 講師 内藤正典氏略歴

一橋大学大学院 社会学研究科教授。

1956年東京都に生まれる。1979年東京大学教養学部教養学科卒業(科学史・科学哲学分科)。1982年東京大学大学院理学系研究科地理学専門課程中退。博士(社会学)。専攻はイスラーム地域研究。現在、一橋大学大学院社会学研究科教授。主著に『イスラーム戦争の時代—暴力の連鎖をどう解くか』(日本放送出版協会)、『ヨーロッパとイスラーム —共生は可能か』(岩波書店)、『なぜ、イスラームと衝突するのか —この戦争をしてはならなかった』(明石書店)、『アッラーのヨーロッパ —移民とイスラーム復興 中東イスラーム世界』(東京大学出版会)など多数。

先ほどご紹介いただいた私の経歴について、最初に少し補足してお話ししようと思います。私はもともと理系の出身で、物理を専攻していたのですが、不幸にして物理にはつくづく才能がないと思ひまして文科系に移りました。そして大学院では地理学を専攻しました。そもそも修士課程まで私のやっていたことは近世農業の肥やしの研究だったのです。私はその後シリアに行って乾燥地の農業技術の研究をやっていたのですが、そのときはすでに砂漠化がかなり進行していました。シリアでは一つ一つ村を訪ねて行って、水利慣行、つまり水をどうやって使っていたかということをおよそ百か所くらい調査しました。そして、それに関して英語で書いた論文がシリア当局に読まれたところ、我々の研究の中に反政府的な活動にあたる場所があったらしく、それが原因で我々は当局からもう二度とシリアに来るなと脅されたのです。それは1980年代の前半だったのですが、それまでにシリア当局は反政府的な人々を相当処分していますので、我々もいつやられても不思議はないと判断して、仕方なく場所を変えようかということになったのです。真面目な人はちゃんとアラブならアラブだけをやるのですが、私の場合はこれが契機となって単にアラブを研究するのが嫌になって、別のものに目を向け始めました。

中東においてはだいたい3つの大きな文化的要素があるのですが、1つはアラブ、そして2つ目はイラン、ペルシャの文化ですね。そしてもう1つがトルコです。シリアから追い払われたのは80年代で、当時イランでは既にイラン革命(1979年)が起こってしまっていて、ここでイランに行っても同じ目に遭うことは分かっていたし、人と直接会っ

て話をして生の人間の声を聞くことからフィールドワークを行おうというのが自分の研究スタンスの前提にありましたので、イランに行ってこれをやると即日国外退去にされるだろうし、やはりここは無理だろうということで、結局残ったのがトルコだったのです。しかし1990年代の前半くらいまでのトルコというのはさほど民主化されていなかったもので、ここもやはり危なかったのです。だから今現在のことを誰かが調査しようとしても、そもそも調査許可が下りないのです。どこかの文書館に行って許可された決まったものだけを読んでくるという、かなり限定された厳密な許可をもらわないと調査目的でトルコには入れませんでした。

では、私はどうやってトルコに入ったかという、その当時日本学術振興会の研究連絡センターというものがまだトルコにありまして、私はトルコ語が不得手なのに履歴書にトルコ語ができると書いて送りました。すると何をどう間違ったか通ってしまい、実際に行ってトルコ語を勉強して、2年経つうちにできるようになっていましたが、結局一番トルコ語を勉強したのはトルコで運転免許を取るために教習所に行ったときです。さすがにアクセルとかブレーキとか、それを間違えるととんでもないことになるのできちんと覚えしました。そのとき分かったのですが、トルコの自動車関係の名称は全部フランス語なのです。ハンドルのことをレクシオンといいますし、クラッチのことをデクリヤージュといいます。近代文明に関する言葉というのはトルコ語にないので大体フランス語から借用していますが、このようなことからトルコがまさにイスラーム圏とヨーロッパの接点の位置にあることが分かります。他にも、今はもうないのですが、旧式の公衆電話をかけるときに使うコインをフランス語でジュトンというのですが、トルコではそれをジェットンといいますし、バスのターミナルのことをトルコではガルというのですが、これもフランス語のガール（「駅」の意）から来ています。詳しくは、「車のガル」なのでオトガルというのですが、フランス語の単語を日本語風（ローマ字式）に読むとそのままトルコ語になることがありますので、分からない言葉があったら何となくフランス語をローマ字式に読めば当たるという奇妙なことがあります。例えば「差別」の **discrimination** をフランス語風にディスクリミナシオンというとトルコ人は分かります。

私はトルコをイスラーム圏の1つの国として研究しようとしていたのですが、実際行ってみますとトルコの中にヨーロッパの要素が広く入っていることが分かります。例えば朝パン屋に普通に行ってパンを買うときには「バゲット」と言って買います。中東のパンというのは平べったくて丸いパンが多く、もちろん田舎に行きますとそのようなパンがあるのですが、「国民のパン」と言いますともうバゲットになっています。トルコに住むうちにだんだん分かってきたのですが、トルコは建国以来85年かけて何とかして国民をヨーロッパ的に啓蒙しようとして、国民の日常に深く関わるパンまでヨーロッパ的に作り変えてしまったのです。またトルコの国内には5つもの国立歌劇場がありますが、ここでは西洋のオペラをやります。私はバレエを見に行ったことがありますが、女性のダンサーはいいのですが、男性がどうも毛が濃くてむさくるしい感じでバレエにはあんまり合わないなど

思いました。ただ、涙ぐましい努力をしてヨーロッパに近づこうとしているのがひしひしと感じられます。

結局、中東文化の1つの要素として私はトルコを選んだのですが、90年代に入りますとトルコではイスラームの復興という現象が起きてきました。実はトルコという国は、フランスをモデルとして自国を「完全な世俗主義の国である」と憲法で決めてしまっているのです。公の領域に宗教が出てきてはいけません。それだけではなく、国が宗教を管理するというようになっています。政教分離というのは本来、政府も宗教に関与してはいけませんが、トルコの場合は、政治が宗教を「管理する」、しかし宗教は政治の場に出てはいけません、そのようになっています。そのため問題がよく起こります。日本で政教分離の話題で一番政治的な問題になるのは政治が宗教を利用するという場合で、もちろんトルコでもそれは問題になるのですが、それ以上に、例えば大学で女子学生がスカーフやヴェールを着用して大学の中に入れるかという、入れないのです。正門のところで守衛に門前払いされるのです。似たようなことはフランスでもありますが、トルコには大学の服装規定がありません。ないのに問題にされることに対して当然女子学生の側から反発が起きますから、そのことをめぐってトルコはずっと揉めてきた。1990年代を通じてイスラームが公の領域に可視化されてきたのですが、従来トルコではそのような流れが強まると、世俗主義を守ろうとする当局と軍がそれを叩いて、その政党を解散に追い込んだりクーデターを起こしたりとかそういうことをやっていました。しかし2000年以降、特に2002年のEU首脳会議以降になりますと、トルコがEUの加盟交渉をすることに対してEU側が態度を変えてきたのです。

それまで40年間トルコは実はEUの前身であるECに入りたいと言いつけていました。しかしヨーロッパ側は、トルコは民主化が不十分で人権が守られていない、特にクルド人などの少数民族の人権が守られずに抑圧されているから加盟は不可能だと言いつけてきました。トルコは条件をまだ満たしていない、ということです。ところが2002年以降になってEU側の態度が変わります。ついにEUはトルコを入れるつもりなのかな、と私は思いました。そしてEUは2004年のEU首脳会議で翌2005年から加盟交渉を開始することを決めます。そのとき私はどうもこの状態が変わるのかと驚いたのですが、2006年になるとEU側が交渉の一部を凍結させてしまいます。

このことに関して私はどう考えても合理的な理屈があつて止めたとは思えないのです。どういうことかという、2001年の9.11事件以降ヨーロッパ諸国の中で反イスラーム感情が強まっていきます。ヨーロッパにとってこれは我々の想像以上に深刻な問題なのですが、それはなぜかという、実はヨーロッパにはイスラーム教徒の移民の人々がたくさんいるからなのです。どれくらいいるのかは、宗教で人口統計をとっているわけではないのではっきり算出できるものではないのですが、大体1,500万から2,000万の間くらいではな

いかといわれています。内訳は、フランスが大体 500 万から 600 万くらい、ドイツが大体 300 万くらいはいるだろうといわれ、イギリスの場合は 160 万から 180 万くらいといわれています。全体として人口の 5% くらいをイスラーム教徒が占めているわけで、その中にはイスラームに改宗したヨーロッパ出身の人もいますが、圧倒的に多いのは第 2 次世界大戦後に移民としてヨーロッパに渡り、ヨーロッパの製造業に携わった人たちがそのまま残ったケースです。

そのヨーロッパのイスラーム教徒に関して、9.11 事件以降非常に興味深い現象が起きてきます。それは何かというと、ヨーロッパの中でも特にオランダとか、デンマークとかは割と「寛容」ということを強く言ってきた国で、多文化共生とか多民族共生のモデルとして扱われてきました。しかし 9.11 事件以降、その年（2001 年）の 12 月末までに同じ国にいるイスラーム教徒の移民に対する暴行事件が一番多かったのは実はオランダであった、ということです。60 件から 70 件近く起きています。ドイツの方が移民嫌いの様相をはっきり見せているので、私はドイツが一番多く起こるのかなと思っていましたが、現実には意外なことにオランダだったのです。

私はその年の 12 月にたまたま学生を連れてオランダへフィールドワークに行き、その時にオランダで多文化共生に携わっている人たちになぜこんなことになったのかと聞きました。オランダ人の答えも、なぜこんなに激しいリアクションが出てきたのか分からず、私たちが驚いているというものでした。今度はイスラーム教徒の移民たちの側に実際どういことが起こったのか話を聞くと、小学校に石を投げられてガラスを割られた、とか、放火されたとかいうことでした。放火のほうは後に反イスラーム感情によるものではなく移民どうしの喧嘩だったということが分かったのですが、石や火炎瓶を投げつけられたとかいう小規模な事例は無数にあったそうです。それから普通の人に聞いてみると、ヴェールをかぶっている女性が唾を吐きかけられて「お前のような原理主義者はとっとと国へ帰れ」と罵られる、あるいは知り合いが通っているバーで飲みましたら罵詈雑言を吐かれるなどの事例が確認されました。60 件とか 70 件とか言っているのは、オランダ政府が認めた暴行事件の数なので、実際にはもっと多いと思います。

そこで私は「あなたの国は『寛容』がうりではなかったのか」とオランダ人に聞いたら、「いや、そうだったんだけど・・・」と行って戸惑うのです。その頃から色々な話を聞いていて分かってきたのですが、現地へ行って調査している私たちの側が「寛容」という言葉を誤解して勝手に理解しているということに気がつきました。寛容と並んでよく使われる言葉に「多文化主義」というものがありますね。日本で多文化主義というと、他の民族の人々や他の文化を持つ人々と生きていくうえで、同化主義に対比させて多文化主義のほうがうまくいくというように考えがちです。日本はどちらかというと同化主義が強いですが、それでもやはり多文化主義の方が多民族共存のためにはいいと考えがちです。そういう点で言うならオランダは多文化主義を制度的に保障してきた典型的な国です。

ではなぜそのような国でこのようなことが起きたのかというと、実はイスラーム教徒が半世紀近く隣にいたのにオランダ人は彼らのことを知らなかったのです。大体オランダに移民が入ってくるのが 1960 年代からなのですが、多いのはトルコ系、モロッコ系、それからスリナム出身者でした。スリナムというのはカリブ海に面した南米の国で、なんであんなところにイスラーム教徒がいるのかと思うかもしれませんが、スリナムは植民地時代にはオランダ領で、オランダ人はそこで働かせる労働力として現在のパキスタンの地域や中国などから労働者を連れて行っており、彼らの中にイスラーム教徒がいたからなのです。そしてスリナムが独立するときにオランダへ渡った人たちの中に彼らも入っていたのです。インドネシアの人々はオランダから独立するときに揉めた経緯があるので意外と少ないです。実際、オランダの人口 1,600 万のうち、100 万近くイスラーム教徒がいますが、その人たちの多くは大都市に住んでいるわけですから、ものすごく人口密度の高いオランダでは、その大都市で移民の顔をつき合わせてみているはずなのです。アムステルダムに行く機会があったら、アムステルダム中央駅の前に立ってどんな顔の人が通るかを見たら一目瞭然です。本当に白から黒まで見事なグラデーションになっています。色々な肌の色の人々がいるのです。しかし実はお互いのことを知らなかった、知ろうとしていなかった。問題はそこにあったのです。イスラーム教徒の人もたくさんいるのも分かっていたのに、彼らが何を考えて、どういう点に不満を持ち、あるいはどういう点でオランダのことを好きだと思っていたのか、コミュニケーションがなかったゆえに結果的に知ることがなかったということです。

そして 9.11 事件が起きた後突然、隣人であるイスラーム教徒がひどく危ないやつだというように今度は思いこんでしまうようになります。日本の現状を考えてみても、隣国に対する嫌悪感をどうやってあおるかということはメディアを見ていれば分かりますが、オランダの場合も実は全く同じことが起きていたのです。

この後オランダでは一つの事件が起きます。それはアヤーン・ヒルシー・アリーというソマリア出身の女性をめぐる事件でした。この人は自分では、大変悲惨な少女時代を送ってオランダに難民として亡命して、その後確かライデン大学の法学部で勉強して弁護士の資格を取り、オランダの自由民主党という政党の国会議員にまでなった人です。彼女は、画家ゴッホの子孫であり、後にイスラーム過激派に暗殺されてしまう映画監督のテオ・ヴァン・ゴッホに『サブミッション (服従)』という自作の映画脚本を提供します。そこで彼女はソマリアのイスラーム社会がいかに非人道的なことをするかということを切々と自伝として書きました。そうしたら 9.11 事件以降のブッシュ政権下のアメリカで、共和党系の人々やネオコンの人々にひどく受けました。ところが、その映画監督がこのサブミッションという映画がもとで暗殺されてしまいます。どういう内容かということ、ヴェールをかぶった一人の女性のモノログなのですが、自分の生い立ちの中でいかに親族から迫害や虐待をうけ、それがいかにイスラームと結びついていたかということとその女性が語る

というものです。しかし、その中で一つだけありえない演出をしてしまったのです。それは何かというと、黒いヴェールを被ってほとんど顔を隠している女性が、つまり敬虔なムスリムであるということを示しているのですが、それなのに彼女の服装がシースルーという演出です。つまり胸から下が見えてしまっているのです。そんな格好を敬虔なムスリムがするはずがありませんし、おそらくこれをイスラーム教徒が見たら激怒したと思います。語っている内容が本当かうそかという以前の問題で、ヴェールを被るような女性ならば絶対に社会に対して胸が見えたりするような格好をするはずがないので、ゴッホ監督は意図的に演出をしたと思われます。

ところがオランダ社会は映画の演出がもとで監督の暗殺に至るといふこの反応に対して非常に激怒します。そして「イスラーム教徒は表現の自由を認めない。こういうことに彼らの不寛容があらわれているのだ」という形で猛烈な反イスラームキャンペーンを展開させます。2002年にはピム・フォルトアウィンという政治家が登場して、露骨に反イスラームというのを掲げて総選挙で突然勝利してしまいます。この人も後で暗殺されてしまうのですが、彼はイスラーム教徒に殺されるのではなくて、同性愛のもつれで殺されてしまいました。フォルトアウィンの後にもウィルダールという人がいまして、今現在オランダの政界の中で次に出てくるチャンスをうかがっているのですが、この人も露骨に反イスラームの立場の人で、イスラーム教徒の移民に対する規制を強化しようということを強く訴えています。

それに加えてここ数年の間に、ヨーロッパ各国は移民たちを統合させるため、様々な居住許可や永住権を与えたり国籍を付与したりするときに、移民の統合度テストというものを行っています。イギリスもフランスもドイツもオランダもやっていて、オランダでは例えば日本人でオランダ人と結婚した人もこのテストを受けなければいけない。私の指導学生でオランダ人と結婚した人がいるので聞いてみたのですが、日本人に行なわれるテストはせいぜい言語テスト程度で、あとはオランダの制度がいかにか民主的かということを行っているかということです。ところがオランダの場合にはたちの悪いことに、トルコ人やモロッコ人など、主たるイスラーム教徒の移民に対しては別の内容のテストがあるそうです。その典型として出てくるのが、同性愛者の写真を見せて嫌悪感を示すかどうかでチェックする、というものだそうです。嫌悪感を示した場合はオランダ社会に適応していないと判断されます。確かに同性愛に対して嫌悪感を示すかどうかがいいか悪いかというのはまた別問題ですが、イスラーム教徒でしかも敬虔な人の場合同性愛は認めていませんので、そういう写真を見せられればおそらく嫌悪感を持ってしまうことになる。それが顔に出てしまったら居住許可は与えられない、ということになってしまうのです。以上は一つの例ですが、オランダでは現在そういうことを行っているということです。

ここで確認したいのは、同性愛に関して不寛容だったところをだんだん寛容に変えていくというプロセスからすれば、同性愛に対して嫌悪感を持っていることは確かにオランダ社会に馴染まないということもいえますが、一方でそれを踏み絵にして、同性愛に嫌悪感

を持つなら出て行けということも許されるようになった、ということです。つまりオランダ人自身は 9.11 事件以降も多文化主義にもとづく寛容が変わったとは思っていないのです。ここは大事な点でして、彼ら自身は自分たちの社会は 9.11 以降も相変わらず寛容であり、不寛容なのはイスラーム教徒の側だ、と決め付ける言説がオランダでは急に支配的になったということです。一旦そうなってしまいますと、両者の壁は非常に厚いものになってしまいます。皆さんご存知のとおり、オランダは小さな国で大都市部の人口密度は非常に高いので、隣人としている人間が不愉快だとされた場合、共存するのが非常に困難になります。つまりオランダの場合、どこかへ隔離することができないのです。

ちなみに先ほどのヒルシ・アリーという女性ですが、国会議員になったことは先ほどお話ししましたが、そのあとの展開が非常に劇的で、その後同じ政党の移民担当大臣から「お前の経歴はウソだ」と明かされてしまいます。これはオランダの国営放送で、アヤーン・ヒルシ・アリーの自伝がウソであるという恐ろしい内容のドキュメンタリーを放送してしまい、その中で実は彼女の一家というのはソマリアではなく、ケニアのナイロビ近郊の裕福な商人の家であったということが明かされたのです。そして本人もそれを認めます。移民担当大臣はそれをあるまじきこと、つまり難民だと偽って入国したということになるので、国会議員の国籍剥奪を実行して彼女に国外退去を迫ります。ヒルシ・アリーの方はその時アメリカの研究所と既に契約を結んでおりまして、アメリカに行ってしまったのです。ところがその後彼女はアメリカでボディガード代が払えないということで最近またオランダに戻ってきました。

アメリカで彼女はイスラーム教徒の家に生まれながら反イスラームの宣伝活動に熱心だった人と認識されています。つまり、ヒルシ・アリーはもともとイスラーム教徒の家に生まれているので、彼女自身が「あんな宗教冗談じゃない、女性の人権を侵すような宗教は嫌いだ」というとアメリカでは一部の人からもてはやされる。オランダでもそうです。しかし多くの普通のイスラーム教徒は、あんな迷惑な存在はないと思っています。つまり彼女の語っているイスラームが活字になっているために、みんなそちらの考え方に行ってしまうわけで、そうすると普段別に大して世論を動かすことのない普通のイスラーム教徒の人たちまで、「あの本で読んだけど、イスラームというのは女性の人権を抑圧し暴力を肯定する宗教なのか」と言われ続けてしまい、普通の生活をしているイスラーム教徒の側もどんどん追い詰められていくことになるわけです。今のヨーロッパはおそらくそういう状況です。

メディアの流すイスラーム認識の問題に関してもうひとつ例を挙げましょう。東京に住んでいると、世界のどこかでテロが起きたときにマスコミからコメントを求められることが多いのですが、2005 年 7 月にロンドンでテロが起きたときにも、私はやはりマスコミからコメントを求められて、その日もある民放の局に呼ばれて夕方頃にスタジオへ行きました。それは事件が起きた当日でしたが、驚くことに放送局に行くついでに「アルカイダ

の犯行説」というフリップができていました。そして打ち合わせの段階でディレクター側から「アルカイダですよ」と確認されました。私は起きた瞬間にアルカイダかどうか分かるわけがないので、そんなこと分らないと答えて、続けてなぜそう思うのかを尋ねてみました。するとディレクター側は外国の通信社からすでにそのような情報が入っている、と言いき、それはどこかと聞くとアメリカの通信社というのです。

アメリカは、事件が起きた瞬間にアルカイダ犯行説を凄い勢いで流します。それはなぜかということ、当然のことながら 9.11 事件の首謀者たちがアルカイダであり、その後アメリカはアフガニスタンに侵攻し、その後イラクに戦争を起こしているわけですから、それはすべてアルカイダというアメリカにとっての敵、文明に対する敵を倒すための戦いだという論理がアメリカでは容易に成り立つからです。そうすると、どこかでテロが起きるとアメリカ政府はいち早くアルカイダ説を過剰に流すことによって、自分がやっている戦争を正当化しようとする方向に動きます。どうしてもそうなってしまうのです。

困ったのは日本のメディアはアメリカからの情報、例えば CNN の情報などがたくさん入ってくるために、それを鵜呑みにして「アルカイダの関与」という言葉がすぐに出てくることです。しかし、研究者としてコメントを求められてもアルカイダであるという確証はありません。証拠がないのでそうしか言いようがない。そこで私ははっと気がついたのですが、「アルカイダ」って実は固有名詞ではないということです。「アル」は定冠詞で、「カーイダ」というのはアラビア語で拠点とかセンターという意味の普通名詞ですから、例えば大学の何とかセンターとかをアラビア語に訳そうとするとこれもアルカイダと訳せる。しかもアラビア語というのは後ろからいろんな修飾語がかかってくる。だから最初の言葉を見ると「アルカイダ」となりますが、その後ろに色々な言葉がかかってくる、例えば「イラクの秘密のアルカイダ」とか「ヨーロッパの秘密のアルカイダ」とか、あるいは「ヨーロッパの聖戦のアルカイダ」にもできるわけです。この「アルカイダ」の部分は先ほども申しましたようにたんに拠点という意味ですが、日本語などと違いまして形容する語句が後ろにかかってくるので、ローマ字に転写するとこの「アルカイダ」の部分が冒頭に来ってしまうのです。そうすると、これは双方ともに知りながらやっているとは思いますが、欧米の人は冒頭を読んですぐ「あ、アルカイダだ」と思ってしまうようになります。最初が一緒なら全部あの「アルカイダ」にしてしまうのです。日本の人たちも同じですが、「アルカイダ」とついていたらみんな同じものだと思ったのです。

話は戻りますが、このことを踏まえて先ほどの民放のディレクターに私は「アルカイダと書いてあっても、以上のような理由から皆さんが考える有名なアルカイダと今回の事件のものが同じかどうかは分からないですよ」と答えました。要するに、そこに気づいてほしいということを行いました。そうすると放送局の人は「え、そうなんですか？ アルカイダと言っているものは全部同じじゃないんですか」と言ったので、私は放送局の人もそのことを知らないと言うことに気づきました。続けて私は「じゃあ、〇〇組と××組という「組」は同じ組織ということで報道するのか」と尋ねたら、それはできません、という。



「それならば少なくともアルカイダ犯行説は、事件が起きた当日の段階では証拠がないので報道として取り上げるべきではない」といって押し返したのですが、その後がまた大変でした。で、キャスターの人には「少なくとも証拠はないので、アメリカの報道を鵜呑みにすることはできない」ということを繰り返し言って何とか説得しましたが、ただ、事件全体の構図をどのようにするかに関して、アメリカから非常に途方もない力が働いていることはよく分かりました。

このロンドンのテロについては数日後に、スコットランド・ヤードつまりロンドン警視庁がアルカイダの直接的犯行ではないだろうというコメントを出しましたので、事件に関しては重大ですが、少なくとも余計な情報が錯綜なくてよかったなという思いがしたのを覚えております。同時に、テロが起きたときにパキスタンかアフガニスタンの山の中にいるとされているアルカイダがわざわざロンドンまで出てきてあんなことをするわけがないだろうというのも思っていました。というのはイギリスにいるイスラーム教徒の移民の中でも、パキスタン系移民2世3世の若者たちの失業率が40パーセント近くと、異常に高いからなのです。そのような状況下で高等教育を一生懸命受けても、職がなく将来の展望がないという状況におかれていれば、当然様々な社会的政治的不満を抱く人はいるわけですから、その中から過激な勢力に吸い寄せられる人がいたとしても不思議ではない。もちろん私はその現場にいませんから断言はできませんが、論理的に言ってそれはありうることだとは思っています。

ちなみに、その事件の前後にイギリスに行ったイスラーム教徒の移民はどのくらいいるのかと思って私はイギリスで公にされている統計を見ました。そこで驚いたのは、住んでいる人の区分の中で、いわゆる「イギリス人」のことを指す言葉として「ホワイト・ブリティッシュ」というのを今でも使うことでした。つまり「ブリティッシュ」というのはそのまま「英国人」、すなわちイギリス国籍を持っている人のことですが、そこに「ホワイト」がついているのです。しかも公の統計にです。日本でこのようなこと書けますか？ここで私は、やはりそのような区分があることに愕然としました。パキスタン移民の人々でも今やイギリス国籍を持っている人も多いですが、どう考えても「ホワイト」ではないですよ。つまり、公の統計でホワイトかホワイトでないかということを明示する国は、潜在的に差別を制度化する構造をとってしまうことが、統計一つ見れば分かるのです。

もうひとつ例を挙げましょう。これも9.11事件以降、比較的最近の2005年7月にデンマークで、預言者ムハンマドの風刺画が新聞に掲載されるということが起きました。デンマークもオランダと同様、長らく人権先進国と言われてきた国で、移民に関するトラブルが少なかった国です。その風刺画が掲載されたのは「ユランズ・ポステン」というデンマークの比較的保守的な新聞でしたが、その新聞が国内のイラストレーターに向けてイスラームの預言者ムハンマドの風刺画を公募しました。どうしてそのようなことをしたかという、実はある作家が『ムハンマドの生涯』という本を書こうとしていたのですが、それ

は子供向けなので当然絵が必要になってきます。そして挿絵を描いてくれる画家を探したが、結局誰も引き受けてくれなかった。そのことが「ユランズ・ポステン」の編集長の耳に入って、ならうちでやろうという話になったわけです。結果的に 12 人のイラストレーターがこれに対して応募をします。

その風刺画を掲載したときの編集長は後に、なぜそんなことをしたかという質問に対して、本音かどうかは別として、イスラーム教徒を侮辱しようとしたり、反イスラーム感情から掲載したのではないと最初に言っています。続けて、デンマークでは女王ですら風刺の対象になるので、王族を風刺しようが首相を風刺しようがそれは言論の自由である、と言っています。確かにデンマークではそうでした、日本のように菊のタブーがないので、日本で皇族を風刺したりするのは危険ですが、デンマークではそれは問題にならないのです。最終的に編集長は、隣人であるイスラーム教徒も我々と同じなのだからこの風刺を同じように受け入れてほしい、という意味で掲載したと締めくくっています。

ここできちんと理解しないといけないのは、少なくとも「ユランズ・ポステン」に掲載されるときに編集長はあらかじめそう説明して企画を行ったのです。つまり、デンマーク人同士ですらイデオロギーなどの違いでお互いを風刺したりする対象になっているから、デンマークの市民であるあなた方イスラーム教徒もわれわれの方に、**they** ではなく **we** の方に入るべきだということをおあらかじめ宣言してこの 12 枚の風刺画を掲載したのです。ところがその風刺画の中には、イスラーム教徒の逆鱗に触れてしまう点が 2 つありました。皆さんも見た記憶があるかと思いますが、1 つはムハンマドの頭の上にターバンが乗っていてそれが爆弾になっているイラストで、イスラームとテロとを非常に強く明示しているものです。それからもう 1 つはもう少し知能犯的なのですが、天国の雲の上にムハンマドがいて、彼が「もう処女は売り切れ」というプラカードを持っているのです。そして地上から焼け焦げた姿の自爆テロ犯たちが天国への階段を登ってくるのです。これはどういう意味かと言いますと、コーランに善行を積んで死んだ人が最後の審判の後天国に迎えられると、処女の妻が迎えてくれる、という話があって、イスラーム的に言えば自爆テロ犯というのは正当なジハードを行っているということになりますから、テロ犯であっても自分は天国行きだと思っているであろう、とその部分を風刺しているのです。この 2 つはイスラーム教徒を怒らせました。その他の風刺画はどうといったことのないものが多いのですが、今もってこの 2 つは許しがたいと思っているイスラーム教徒は世界中に大勢いるようです。

この風刺画が掲載された直後に、当然デンマークのイスラーム教徒が騒ぎ出します。そして事態を重くみたコペンハーゲン駐在のイスラーム諸国の大使たちがデンマーク政府に抗議をします。ところがここからが問題でした。デンマークの首相にまで抗議が行ったのですが、首相としてはマスコミの言論や表現の自由に対していちいち政府が口を出すことはできない、という立場なのです。日本でもそうですけれども、政府がマスコミに介入することはできないですよ。そして、ラスムッセン首相は大使たちとの会見を拒否します。

政府側の見解としてはやはり、デンマークという国は言論の自由が保障されている国だから、一部のマスコミが発言したことに対して政府はそれを規制できない、というものでした。そう言われると大使たちは、例の事件にこのような回答をなされたら本国政府に報告して、そこから事態がさらに大きくなっていきますが、ここでデンマーク政府は、あくまで私個人がそう思っていることですが、やるべきじゃない行動をとってしまいました。というのは、ラスムッセン首相は一貫して黙っていたらよかったです、彼はその後 10 日ほど経ってから風刺画を掲載した「ユランズ・ポステン」のインタビューに応じてしまいました。しかもそのときに彼はこの事件のことを「表現の自由、言論の自由の戦いだ」と言ってしまったのです。当初風刺画を掲載したときに編集長は先ほども確認したとおり、「イスラーム教徒もデンマーク市民であるからあなたがたもこの風刺画を受け入れてほしい」と言ったはずでした。ところが首相がコメントを出したときには「これは表現の自由と、それを認めないイスラームとの戦い」という図式にすりかわってしまいました。そうなったら最後、イスラーム諸国の大使たちは後に退けなくなってしまいます。この事件はその後イスラーム諸国会議機構（OIC）というところで問題にされて、事件から数ヵ月後に世界中で知られるようになり、レバノンやシリアでもデンマーク大使館が襲撃される事件まで起こりました。

この背景には個人の自発的なものか政府が組織的に動いたものか諸説あります。またそれだけではなく、今年 2008 年になってからも風刺画を描いた画家の 1 人が暗殺されかけていますし、6 月にはパキスタンのイスラマバードのデンマーク大使館で自爆テロが起きている。私はしませんが、誰かがイスラーム側の不寛容を非難することはできますし、してもいいとは思いますが、一旦対応を間違えたりボタンを掛け違えたりしてしまうと、どれだけ危険な対立が起きるかという貴重な例としてこの事件をみることができます。

同じような例は、2008 年になって日本でも起きています。発覚したのは 5 月ですが、集英社が出している漫画『ジョジョの奇妙な冒険』にまつわる話です。この中に悪役がヒーローを殺せと手下に指示している場面で悪役が座って本を読んでいるシーンがあるのですが、原作のコミックスの方でその本は白地に黒い点々しかなかったのに、アニメ制作会社がアニメ化する際にそこをコーランにしてしまったのです。後で詳しく調べたらこれには全く意図がなかったそうです。

そして今年 5 月前後に、コーランを使ったことに対して中東のウェブ上で非難が殺到している、ということになります。これも後で調べてみると、確かにウェブサイト上に非難の書き込みがあったことは事実ですが、抗議活動などは起きていないようでした。それを出版社側に指摘して、結果的にニュースとして全国的な報道になったのは共同通信の配信によるものでした。このときに本当に難しい問題だと思ったのが、原作者にイスラームを侮辱する意図など毛頭ないというところです。そもそも原作が書かれたのが 1989 年くらいなのです。それで、経緯もこと細かく調べたら、集英社の編集者の中に中東好きの人が

いて、その人が原作者を無理やりエジプトに連れて行ったからこういうことになったのではないかということだそうです。

事件が起こった後、ジョジョ好きの学生がそれを全巻読んで危なそうなところを100か所以上指摘して私のところに持ってきてくれました。そこで分かったのですが、ジョジョにはヒーローと敵役がカイロにあるモスクのミナレット（塔）をもぎ取ってお互いに投げつけあうというもっと危ないシーンがありました。こちらの方がよっぽど危ないです。これは原作を変更してもらわないと困りますが、その時点で共同通信は批判的な活動が起こることをつかんでいるので、当然原作側にもそのような危ない点があるということに気づいていたと思います。

そして今度は集英社の側がどのように対応しようか、と私のところに相談してきました。私は先ほどお話ししましたデンマークの事件のことをあらかじめ説明した上で、①無視する、②つっぱねる、③謝る、という3つの選択肢しかないと答えました。それで集英社にどうしますかと尋ねたら、直ちに謝罪すると決めて、実際すぐに謝罪しました。なぜ謝罪という選択肢を選んだのかと集英社に聞いたら、非常に日本的だなと私は思ったのですが、集英社は以前差別に関して問題になったことがあり、その経験をふんでこう判断したと答えたのです。日本国内の差別問題で糾弾されたのを踏まえてこれまで研修などを積み重ねてきたそうです。そして、少なくともイスラーム教徒に不快感を与えるならば、日本での差別事例と同様に対処すると決めたのです。

これはヨーロッパではまず起きない対応の仕方です。公表する時点でこれは表現の自由だつっぱねるならつっぱねるでいいのですが、この場合集英社が当然後で非難を受ける可能性があります。デンマーク大使館が襲撃された事例からも分かるように、日本の在外公館も同じように襲われる可能性だってあります。もちろんそのことに怯えたということもあるでしょうが、集英社側は一貫した判断をして、過去の事例と同じような差別事例として扱って直ちに謝罪したいと言いました。ならば日本語と英語だけでは不十分なので、アラビア語でも謝罪文を用意すべきだと言うと集英社はすぐ用意しました。今でも集英社のサイトを見たら「あのカットはミスで入ったものであり、ムスリムを傷つける意図は全くなかった」という旨のアラビア語の謝罪文が出ています。そして、共同通信に先には指摘されなかったのですが、戦争のシーンでモスクを舞台にしていることも不適切であるということも先行して認めたのです。

そこから先は私はよく知らないのですが、集英社と共同通信でもめたのでしょうか、共同通信はこれを特ダネとして出したかったようです。5月22日に朝刊に一斉に記事が出たのですが、その時点で既に集英社がお詫びを用意しているので、午前6時に共同の記事が配信されると、午前10時には集英社側はお詫びをすぐにアップしていました。

そして今後どうなるのかと思って私は学生に頼んでインターネットなど各種メディアで何が起こるかチェックしてもらいました。配信されたのは朝ですからまず昼ごろにはテレビでニュースとして出始めました。そして夕方までにインターネット上では「ジョジョ イ

スラム」 「ジョジョ コーラン」で検索すると 10 万件以上ヒットしました。色々な掲示板に数百のスレッドが立っていたのですが、その中の意見を見ていると、当初は「イスラーム教徒はだから言わんこっちゃない」という意見が圧倒的に多かった。そして「そんな抗議に謝罪をする集英社は弱腰だ」という意見も多かった。私はこの流れは危険だなと思っていました。そうするうちにこのことに関して非常に憂慮しているというイスラーム教徒の人の書き込みも始まっていました。

事態はどちらへ進むのかなと思って私は静観しておりましたが、ヨーロッパでは起きない意外な展開になりました。まず背景を説明しますと、『ジョジョの奇妙な冒険』というのは非常に熱心なファンがいるらしく、しかも結構昔から連載されているので、30 歳代半ばから 40 歳代のファン層もいるのです。そのなかに何人か中東の専門家らしい人がいるらしく、彼らがそこでちょっと待てと促しました。そしてそのうちの一人が、新聞では中東で非難殺到という見出しになっているけれども、実際どこでそのようなことが起きているのか、ということを検証するためのブログを立ち上げたのです。その人の言い分は、結局どこでも起きていないのではないかと、ということです。私も後で確認して分かったことですが、ネット上に確かにそのような書き込みはいくつかあるけれども、それは同じ文章が転載されており同一人物によるものではないかと思っています。しかもその投稿者は、アニメ中で出てきた悪役がコーランを読んでいるシーンの写真を添付しているのですが、イスラーム系のサイトになればなるほどそういうシーン自体が不適切なので、まず掲載しません。しかしアニメオタクのサイトとかには載っているのです。となると、どうも中東で非難殺到という状況ではなかったこととなります。ならばネット上で炎上した状態になっていたかという、それもそこまでは達していないのです。

ここで、この状況がいかに危険であるかということが分かります。つまり、日本語と英語の共同電が出てしまったことにより即座にイスラーム諸国の駐日大使館は外務省に抗議しています。そこでもし日本の外務省がデンマーク政府と同じように、民間の一出版社のことだから国としては関与できないと言っていたらこの後同じことになっていったはずですが。ただこの場合、集英社が会社として公式に謝罪します、と事前に外務省に説明してあったので、翌日には『ジョジョの奇妙な冒険』について」という外務報道官談話の中で「不注意とはいえ遺憾である」という声明を出しました。外務省はなぜこの声明を焦って出したかという、その直後に横浜でアフリカ開発会議が行われることになっていたということと、さらにその後にサミットが予定されているということでそのことで外務省はかなり恐怖感をもったということがあるでしょう。しかし今回の反応を見ていると一番重要なのは、ネット上でもそんなに大事にはなっていないのではないかと、ということを何人かの熱心なファンが書いたことでしょう。

その後日本の掲示板での反応を見ていると、どうやら共同通信社がマッチポンプだったのではないかと、という論調に傾いていきます。実際にそういう書き込みが増えていきました。他の報道各局は第 1 報で共同電をとりますが、それからは後追いの報道がぱったりと消え

てしまいました。私は学生さんと名乗っている人の書き込みに感心したのですが、おそらくメディア論か何かをやっている学生さんでしょう、その人は共同通信に「ネット上の一部の話であるだけで、実際は中東で非難殺到ということはないのではないか」という旨の電話をしたら、そうしたら共同通信はあっさりそれを認めたというのです。そしてネット上の「荒らし」のような人物がやっているのではないかと質問したところ、それに対しても共同通信の東京本社は認めたということです。

このケースは以上のようないきさつがあったためにその後急速に沈静化します。逆に共同電によってはじめて世界中が、日本のあるマンガの中に反イスラーム的な描写をしたシーンがあるということを知ったといえるでしょう。実際そうでした、その数日後私はトルコの新聞を見てはっと気がついたのですが、トルコの新聞に掲載されているジョジョに関する記事は一種の伝言ゲームの様相を呈していたのです。まず、ジョジョというのは主人公で正義の味方なのですが、その新聞記事中では悪役とジョジョがひっくり返ってしまっていて、正義の味方、つまりヒーローの方が敵を殺せと命じるときに、「コーランの中に殺せとある、だから殺すのだ」という台詞になっていると伝わっていました。これは全く事実無根なのですが、「日本のマンガがデンマークの新聞と同様にイスラームを冒瀆した、その中ではコーランに殺せとあるから殺せと命じるシーンがある」と、そういうふうにかかれているのです。そのように伝わったものをいくつか見つけました。これが一番怖いのです。一旦そうになってしまったらもう收拾がつかなくなってしまうのです。幸いにして AFP がどうも集英社に取材をしたらしく、共同電とはちがうトーンで記事を出したので、フランスの新聞は主に AFP 電の方を使っていました。

この件は、結果的には集英社側が謝罪したということが表に出ているので、それ以上のことには今のところなっていません。しかしもしあのまま伝言ゲームが続いてどういうことになるかという、イスラーム教徒の過激派の人がテロを起こすとしたら、あるいはテロを起こすほど怒ってしまう人がいたら、一つははっきり言えることはその人は絶対に実物を見ていない、ということです。つまり、そのような人たちはわざわざそんな忌まわしく汚らしいものを見るわけがありません。これはデンマークの風刺画事件のときにもいえることですが、普通は実物をつぶさに見て激怒するということはないのです。デンマークの新聞社がムハンマドを冒瀆した、あるいはムハンマドをこういうふうを描いた、とこのような話が人づてに伝わっていくうちにどこかで怒りが爆発する構造になっています。

話が前後しますが、共同通信の別の記事を見て私も一つ疑問に思ったことがあります。それは全国紙が使っていない記事で、いくつかの地方紙が掲載していたものなのですが、それはエジプトにあるアズハルというイスラームの学校の宗教指導者、ファトワという宗教見解を發する院長が写っている写真です。彼はノートパソコンを見ていて、そこに出ているのは問題のコーランで、そこを指差しているショットです。断言はできませんが、この写真のショットは共同が持ち込まない限りありえないと私は思います。つまり、宗教指導者がわざわざ自分でこのマンガのこのシーンがけしからんというのであれば、すでに一

般の民衆の間でこのことが問題になって抗議行動が起きて、じゃあアズハルにいて質問して宗教指導者の見解を聞きに行く、という場合なので、そのときに実物をノートパソコン上で示すということはまずありません。ということは、これは取材した記者が持っているものに対して指差しているのではないか、ということがいえます。そうするとやはり一連の取材の仕方自体に疑問を抱かざるを得なくなってしまうのです。

これが非常に危険なことだといったのは、共同が配信した英語の記事をジャパン・タイムズ上で見たら、「アズハルの指導者は日本製品のボイコットを呼びかけた」、それから「アズハルの指導者は日本もアメリカ同様にイスラームの敵だと言った」ということが書いてあるからです。面白いことに、エジプトの大きな新聞にアハラムという新聞がありますが、アハラムがこのことを記事にしたのが共同電をもとにしてその2日後に載せていました。ということはエジプトの新聞社が知らず、知っていたのは共同通信だけということですから、確かに事実なら特ダネ、しかし火をつけようとしたのであれば非常に危険なことをしたことになります。しかもそれがどういう形で伝言ゲームになっていくかということまで考えれば、それまで全く悪意のなかったものが、一歩間違えれば重大な衝突を生み出す原因になってしまうということであり、これは日本でもおきうることなのです。

その後私は他にも誤解を生みそうなシーンはないかジョジョの原作を見てみました。そして見つけたのが、モスクというのとはかならず丸い屋根があって、隣にミナレットという、アザーンという礼拝の呼びかけを流すための塔があるのですが、原作ではそれをバサッと切ってヒーローと敵役が投げつけ合ってそれを破壊するというシーンと、ヒーローの仲間がミナレットの上に仁王立ちになり、その後彼が敵にやられてあたりに飛沫が飛ぶというシーンでした。さすがにこれはまずいと思いまして私はそれを出版社に伝えました。原作者は現在どうするか検討中らしいです。例えば、ミナレットではなくオベリスクだったら古代エジプトのものなので問題はそうないかと思うのですが、オベリスクの隣が丸屋根のモスクというのもありえないと思います。かといって両方を取ってしまうと絵が変わってしまうので、すでに熱狂的なファンの中には、あの部分が問題なら今後差し替えたときにどう変わるのか、ということまですでに議論されているそうです。そのまま出ているとやはりまずいものはまずいものままですし、かといって改変すると原作者と出版社の表現の自由が脅かされるでしょうし、昔からのコアなファンからの反発も招くでしょうし、大変難しい問題です。私は研究者なので、自分の研究フィールドに照らしてこういうところがまずいのではないか、という程度しか言うことはできないのでそれ以上踏み込めないのですが、何とかぎりぎりのところでお互いの反発を招かないところに結論を落とすようにするのが一番かと思います。

レジュメに書いたことと少し違う話になってしまいました。私の話でもう皆さんお分かりになったと思いますが、この一連の話から分かることは、これらの本質は「キリスト教対イスラーム」ではない、ということです。確かに9.11事件以降世界のあらゆる状況を考

えても欧米とイスラーム世界の間が非常に緊張していることは事実です。しかし、何が元になって突然発火してしまうか、つまり何がきっかけになって実際の暴力に発展するかということは、今回最初に提示した疑問でも分かるように、両者がそれまで想像していなかった全く意外なところから起きてしまうということがあるのです。おそらく共同通信だって別にあんなに問題をこじらせる意図はなかったでしょうし、マンガの原作者にしても同じでしょう。しかしたまたまの現象が重なっていくと、一触即発の事態になることがあります、ということがお分かりになったかと思います。皆さんもこれから国際的な場で活躍していくことになるでしょうから、今回の事例が参考になればと思いお話しさせていただきました。